コレンテ　vol. 42　n.366　　maggio　2021

CORRENTE

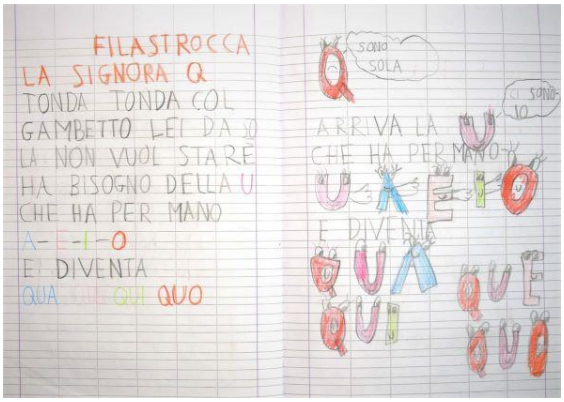
Centro Culturale Italo-Giapponese

＊ローマで双子育児⑰＊

浅田 朋子

イタリアでは2020年春の3ヶ月の都市封鎖後も、コロナウイルス感染拡大防止のための制限措置が常に適用されている。保健省により、ZONA ROSSA（レッドゾーン）、ZONA ARANCIONE（オレンジゾーン）、ZONA GIALLA（イエローゾーン）、ZONA BIANCA（ホワイトゾーン）と各州は4段階に分けられる。ZONA BIANCA は規制なし、ZONA ROSSA は一番厳しい規制があり食料品、生活必需品小売店のみ営業許可、薬局・ドラッグストア・タバコ屋・新聞雑誌売店は営業可、その他の店舗は全て営業禁止、飲食店はテイクアウトのみになり、教育機関は全て閉鎖である。外出は常に制限付きで居住地以外の地域への移動も禁止となる。

私たちの住むラツィオ州ローマは、イエローとオレンジゾーンを行ったり来たりしている。クリスマスのバカンス期間は全土でレッドゾーンが適用された。



【国語（イタリア語）のノート 1】

そして 2 月末ごろから少し落ち着いていた感染がまた拡大してしまい、ローマはパスクア（復活祭）のバカンス前後の約 3 週間、レッドゾーンが適用されることになった。クリスマス休暇後、ローマはイエローゾーンになり、店舗も時間制限や入場制限があるものの営業することができ、学校も再開して順調に思われていた矢先の厳しい規制は、かなり精神的にも参るものだった。確かに感染者数は増えている。が、ワクチン接種もすでに開始されているにも関わらず、刻々と変わるイタチごっこのような状況にみなうんざりしはじめた。

週明けの月曜からレッドゾーンが適用されると発表された金曜日、学校帰りにいつも子供達が遊ぶ公園では、親たちが月曜日から始まる didattica a distanza [DAD]（オンライン授業）や休業、リモートワーク、政府の方針等、ありとあらゆる不満を大声で語り合っていた。「あー！！あり得ない、この状況！一年もコロナ感染が続くなんて」「もうすぐパスクワなのに、どこにも行けないなんてね・・」すると、一人の母親が「よし！ちょっとアペリティーヴォするわ、私。バールに貢献してくる」と言い出した。「あ～いいわね！私、カンパリにする」「私ビール！」と次々にママたちがアペリティーヴォ案に乗りはじめた。ちなみにカンパリのママは学校評議委員である。私のママ友で双子男子の母であるロシア人のレーナちゃんは「私、ウォッカ！」と皆を笑わせた。キアラちゃんのママが「私がまとめて買ってくるわ。みんな何がいいの？」と注文を聞き始め、バールから大きなトレ

一に大量のカクテルやビールを乗せて公園に戻ってきた。「Salute a tutti noi!!（みんなに乾杯！）」私たちは笑いあってグラスを高くあげた。

その日の夜、保護者の SNS グループのチャットでは「明日は 9 時からよね、イタリア語からよね？」「参加コードは abc-defg-hij よね？ハイフンは入れるの？」「用意するのは普段の授業と同じなの？」などと細かいことを事前に確認するメッセージで溢れた。イタリア人は準備を怠る人が多いという印象があると思うのだが、これは自分自身に対してだけである。イタリア人マンマは自分の子供のこととなると恐ろしいほどの情熱と時間をかけ周到に準備するのである。この細やかな配慮と事前準備を国全体にも適用してくれたらイタリアはもっと過ごしやすくなるのに・・。

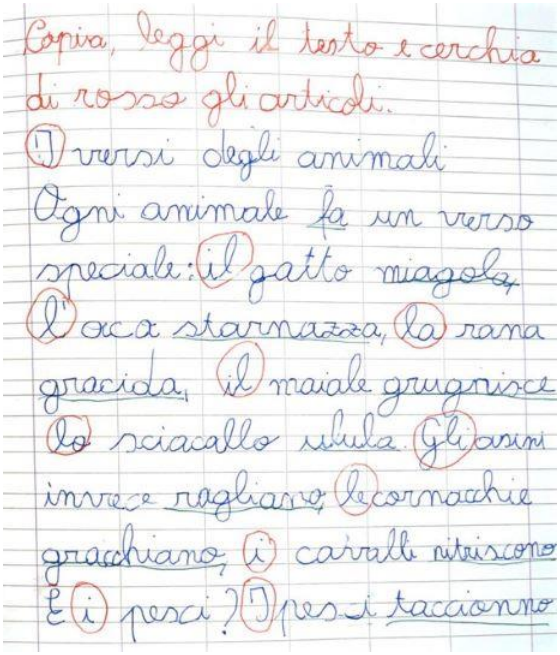
翌日から双子のオンライン授業が始まった。授業はビデオ会議用のアプリケーションを使い、朝 9 時から 45 分授業を 2 コマする。週に 2 日、午後に授業が 1 コマある。

「あ～楽しみ！」と双子はとても嬉しそう。特に双子は家が大好きなので、家にいながら学校の授業を受けられることに感動していた。

双子の一人は B クラスで担任先生は国語（イタリア語）の先生である。この先生はスパルタで授業スピードが早く、宿題もとても多い。A クラスはまだゆっくり筆記体を勉強しているが、B クラスはとっくに終わって文法を勉強している。

B クラスでは、最初に先生がオンライン授業のやり方を子供に教えた。「出席をとる時と、先生が質問した時だけマイクをオンにして、そのほかの時はマイクを切ってね。ママたちに頼らず自分でやりなさい。学校と同じように、ママたちがいないと思って授業を受けなさい。わかりましたか！」最初から強気である。ちなみに私は家でこの先生のことを「鬼」と呼んでいる。鬼は親たちにも「画面に出てこないでください。付き添ったりしないでください！」と事前にきつく言っていた。鬼のいうことは正しい。親が授業に付き添わなければならないと、在宅で仕事する親はその間、仕事ができなくなる。子供達は自分たちで簡単な操作をできるように頑張らなければならない。

さて、先生が出席を取り始めると大騒ぎになった。もともとおしゃべり好きで声の大きいイタリア人、これは大人だけではない。「カテリーナ！Ciao!!」「先生！マイクつけてもいいの！？」「Ciao a tutti!!」いきなり大混乱である。「マイクを切りなさい！自分の名前が呼ばれた時だけマイクをつけなさい！」と先生も大声で叫ぶ。静かに黙っていられない子が多いイタリアでは「マイクオフ」は必須であり、これをしないと授業どころではなくなる。



【国語（イタリア語）のノート 2】

20 分かけ出席を取り終え、やっと国語の授業が始まった。ノートに文章を書き写し、文章内の男性名詞、女性名詞を色分けして丸で囲むのだが、先生が文章を画面に映し出すと子供たちが「先生！小さくて見えない！」「先生、ノートのどこに書けばいいの？」「見えている大きさで、いつもより小さく書くの？」と、それはもう質問の嵐になった。先生の表情を画面外からみると、すでにかなりの疲労が見られる。「マイクを、切りなさい！」「先生！！赤で書くの？」「先生！！はじめは一行あけるの？」「マ、イ、ク、を、切れ！！」「先生・・・声が聞こえない」「先生、私、もう書けました」「僕はまだ！」「すぐにマイクを切りなさい！」やっとマイクを切り静かになった生徒たちに「質問がある子は手を挙げなさい！先生が名前を呼んだ子だけマイクをオンにしなさい。」というと、今度はみんな

一斉に手をあげ出した。マイクを切っているが、子供達はそれでも構わず喋っているので、口パクになっている。その様子はまるで無声映画時代のコメディーである。私はその光景を見て腹を抱えて笑った。「あ～おかしい！笑っても聞こえないし、マイクオフは便利やなあ～！」というと娘に睨まれた。手を上げた中から、先生はおしゃべりな子は避け、いつもおとなしい子を選び「ルチャーノ、質問していいわよ、マイクをオンにして」と言った。ルチャーノは嬉しそうにオンにすると大きな声で「先生、トイレに行ってきていいですか！」と言った。鬼はしばらく沈黙し「・・・・行ってきなさい」と力なく答えた。学校と同じようにとは言ったが、ルチャーノよ、自分の家なのだから、そこはそっとトイレに行ってきてよ・・・と先生の心の声が聞こえるようであった。

2 コマ目は算数の授業。この初日だけ、副担任ではなく臨時の先生となった。ジャンルーカ先生はこの小学校によく来る臨時の算数の先生で、子供達もすでに知っている。若くて面白いジャンルーカ先生はとても人気があった。2 コマ目の授業の時間になり皆そろったのに、映し出されるジャンルーカ先生の画面は部屋だけが映り、先生本人の姿がない。「せんせー！」「ジャンルーカ先生！どこ！？」「先生トイレかな」子供達が騒ぎ出し、親たちも異変に気がついた。保護者のチャットでは「ちょっと！どうしたのよ、先生！？何でいないの」「あの先生、ボーっとしているから時間、間違えてるんじゃないの？「でも、画面はオンになっているよね・・」と親たちも騒ぎ出した。そして心配になった親たちは画面に出てきて誰もいない先生の自宅の一室を覗き始めた。マイクは全員オンになっていて、今度は親も含めたカオスが始まった。「先生！授業開始時間ですよ！？」「先生が消えた！」「ちょっと！ほんとにどうなってんのよ・・」「まさか倒れてるとか・・」「ママー！先生、朝ごはん食べてるんだよ！」

20 分ほど経った時、突如、コーヒーを持ったジャンルーカ先生が呑気そうに画面に現れた。音声は切っていたのか、コーヒーを飲みながらパソコンに近づき、睨みつける親と騒ぐ子供達に気づくや否や、慌ててマイクをオンにした。「あ！こ、こんにちは！あー、えっと授業を始めたらいいのかな？あれ、もう時間かな？」と大慌てで授業の準備を始めた。子供を押しのけ、マンマたちが画面に食いつきそうな勢いで「先生！！授業は10 時開始ですよ！今、もう10 時 20 分です！」と叫んだ。「ああ、知っています・・。ちょっと、他で・・準備をしていたのです・・」と苦しそうに言い訳した。保護者のチャットでは「準備って、コーヒー用意してたんでしょ！」「呑気だわ～、羨ましいわね」「コルネットが口の端についてた」とみんな皮肉っていた。子供達はマンマに怒られ慌てる先生を見て大いに楽しみ、その後はまともな授業にならずにその日はあっけなく終了した。

問題ばかりのようなオンライン授業も1週間をすぎると先生も子供達も、そして保護者も慣れた。しかし、スムーズに行われる授業を見て、少し複雑な気持ちになってしまう。

技術が発達したこの世の中だからこその便利なシステムなのだが、特に小学生にとって「学ぶ」ということは、こんな単純なシステムで補えるものなのだろうか。学校という場所で、教室で、先生や同級生といろんなことを体験し、毎日少しずつ学び、そして成長していくのではないか。

学校が再開した日、校舎から生き生きとした表情で、そして全身から充実し満足した気持ちが溢れ出ている子供たちを見て、ふれあいの中で学ぶことは幼い子供にとって何よりも一番大切だと感じた。

1日でも早く、子供達が通常の学校の環境で学べるようになってほしいと、心から願う。

（元当館語学受講生）

イタリア人の見た日本：『天皇の傘』の場合

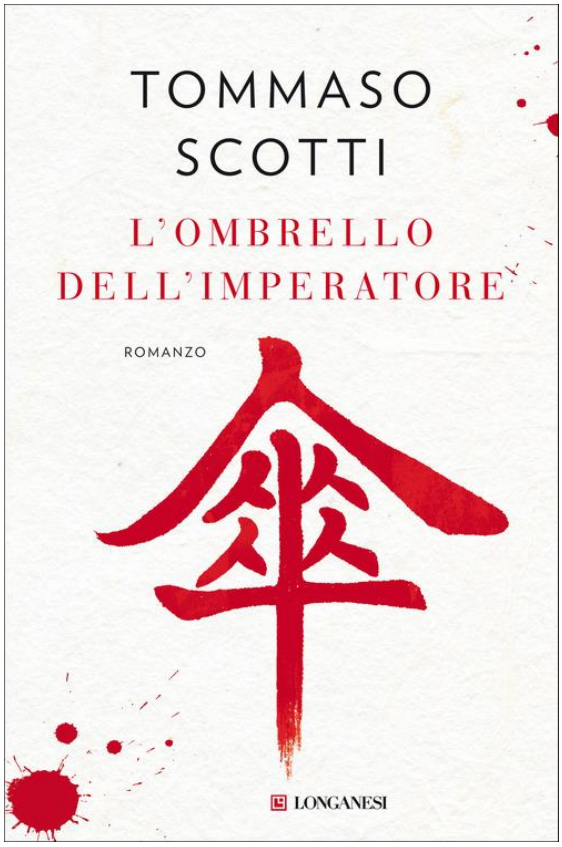
二宮 大輔

『天皇の傘』という小説の存在を知ったのは今年初めのことだった。定期的にチェックしているオンライン書店 ibs.it の最新作のページに掲載されていたのだ。表紙いっぱいに赤字で書かれた「傘」の漢字もさることながら、やはりそのタイトルが目を引いた。“L'ombrello dell'imperatore”、直訳すると「天皇の傘」である。映画や小説のタイトル、新聞の見出しや広告のキャッチコピーなど、短文になればなるほど、イタリア語を日本語に直訳すると、おかしな印象がぬぐえない。一因としては、イタリア語と日本語で耳あたりの良い言葉の響きが違うからだろう。それを差し置いても、なんというタイトルだ。

同ページの概要によると、捜査一課に属するニシダを主人公にしたミステリーのようだが、その内容がまたとんでもない。新宿歌舞伎町の自宅で男が惨殺された。凶器として現場に残っていたのは、ありふれたビニール傘。ところが鑑識がそれを調べたところ、そこには天皇の指紋が残っていた……というもの。

作者は 1984 年ローマ生まれのトンマーゾ・スコッティ。2012 年に来日し、数学で明治大学博士課程を修了。現在も東京に住み、プログラマーなどの仕事をしつつ、2021 年 1 月に本作で作家としてデビューした。

日本を舞台にした小説でイタリア人が書いたものなら、少数ではあるが、これまでにも発表されてきた。大阪に滞在歴のあるファビオ・ヴィオラ『蒸発』(Sparire)や、当会報誌 2017 年 2 月号で私がインタビューをしたマリオ・ヴァッターニ『泥水』(DOROMIZU)などだ。だが、これら二作がイタリア人を主人公にしているのに対し、『天皇の傘』ではニシダという日本人が主人公だ。さらにこのタイトルとあらすじから推測すると、一歩踏み込んだ日本がテーマとして描かれているのではないだろうか。そんな期待を胸に、さっそくデジタル版を入手してページをめくってみた。以下がそのあらすじになる。



【“L'ombrello dell'imperatore” 表紙】
出典元：https://www.ibs.it/ombrello-dell-imperatore-libro-tommaso-scotti/e/9788830456464

警視庁捜査一課のニシダ・ジェイムズ・タケシが新宿歌舞伎町の殺人現場に向かう。現場は 1K のマンションの一室。独り暮らしをしていたユキ（ユウキ？）・フナガワがむごたらしく殺された。第一発見者はユキの元彼女のカオリ・カワイ。犯行に使われた凶器は現場に残っていたなんの変哲もないビニール傘だが、鑑識が調べたところ、膨大な登録データのなかで唯一はっきりと合致した指紋は、天皇のものだった。過去に犯罪防止キャンペーンの一環で天皇自ら指紋を登録したことがあるため、データがあること自体は理解できるのだが、殺人の凶器にその指紋があるというのは、にわかには信じがたい。ここからニシダの「天皇の傘」の持ち主をたどる捜査が始まる。

まず、かすかに残った指紋を手掛かりに容疑者リストの上位に浮上したネジとボルトのメーカー山田スチールの社長マコト・オガワ。彼はファミリーマートで買ったビニール傘を電車のなかに忘れてきたという。

続いて小田急線の鉄道員でギタリストでもあるリュウスケ・サトウ。マコトが車内に忘れた傘を回収し、勤務終了時、雨が降っていたので、そのまま使ってしまったのだ。リュウスケが行った先は歌舞伎町のキャバクラ。リュウスケはレコード会社の担当者に連れて行ってもらったときに接客してくれたナナミ・アマノに一目ぼれして、現在も店に通いつめてナナミを指名しているのだ。

リュウスケと勤務を終えたナナミは同じタイミングで店を出る。外はまだ雨が降り続けている。そこでリュウスケは自分の持っていた傘を強引にナナミに渡してその場を立ち去る。リュウスケに感謝しつつナナミが向かった先は、お台場のクラブ。なんでもない傘だが、下心なく傘を渡してくれたリュウスケの行為がナナミは嬉しくて、大切に扱い、最終的に自宅に持ち帰る。自宅に持ち帰った大切な傘を勝手に持ち出したのが、いっしょに住んでいるナナミの母ユウコ・タカハシ。彼女は捜査にきたニシダに「スーパーに傘を忘れた」と嘘をつくが、実際は出会い系アプリで知り合った男の家に忘れてきてしまったのだ。

アプリで知り合った男マイク・ハートはシカゴ生まれで、2004 年に留学で日本にやってきた。その後も日本に残り、英会話教師などで食いつないでいたが、パーティーで知り合った日本在住歴の長いアメリカ人の羽振りの良さに触発され、キャリアアップに腐心するかたわら、多数の女性と関わりをもつようになる。こうしてユウコと出会い系アプリで知り合い、タワーマンションの自宅に連れ込み行為にいたる。いっぽう自らの行いに罪悪感を覚えたユウコは、傘を忘れたまま、慌ててマイクの家を後にしたのだった。

翌日マイクは東京ビッグサイトで開かれた大規模な就職説明会に参加する。マイクは人材派遣会社に勤めており、自社のブースが出ていたのだ。件の傘も持って行っており、ブースの傘立てに置いている。今度は、そのブースにやってきた東京大学の学生トウマ・サカモトが、傘を取り違えてしまう……。

傘を一時的に手にしたひとりひとりに、ニシダは直接会ってさぐりを入れるが、次から次へと傘の所有者が現れ、一向に埒が明かない。そこでニシダは、相棒のジョーの助けを借り、別のアプローチを試みる。近年起きた未解決殺人事件のリストをつくり、今回の事件との共通点をさぐるという手法だ。そして偶然プレイしたオンラインの戦闘ゲームから、リストアップされた事件の犯行に使われたのが、バットやフライパンなど、いずれもゲーム上、戦闘で使用できる道具と合致することに気づく。そして傘もまたゲームに出てくる道具の一つだった。こうして、リストのなかからいちばん日にちが古いフライパンで殺害された老婆の孫、引きこもりの少年ケイジ・ナカセに辿り着く……。

主人公のニシダは日本人とアメリカ人のハーフで、彼もまた日本社会に違和感を覚えている。そんな彼が傘の所有者さがしのために様々な世代の様々な職種の人間を訪ねて回る。仕事に生涯を捧げるサラリーマン、キャバクラ通いだがミュージシャンを夢みる青年、誠実な愛を求めるキャバ嬢、出会い系アプリに手を出す中年女性、日本社会に怪訝な目を向ける外国人、受験戦争に勝ち残ってきた東大生という具合だ。つまり物語は東京で暮らす人々の生態系を紹介する仕組みになっている。

そこには例えばマタニティハラスメントや死刑制度、象徴天皇制などの社会問題から、両手を使って名刺を交換するルールや、美術館で調べ物のためであっても携帯電話が使用できない不自由さなど、外国人が見た日本のおかしな風習も含まれている。つまり、本作は日本を知らないイタリア人読者に向けたガイドブック的な役割も果たしている。

日本人の私の目から見ると、登場人物の名付け方や、たまに出てくる日本語を不自然に感じたり、登場人物の行動があまりにもステレオタイプではないかと思ったりもした。だが、イタリアはミステリー大国で、出版界を支え続けているのはミステリー読者だと言っても差し支えない。そんな彼らにとっては、見知らぬ国を舞台にした刑事ものの本作は、変わり種のミステリーとして十分に

楽しめたのではないだろうか。先述の ibs.it や Amazon.it のコメント欄を読んでみても、おおむね好評のようだ。

それとは別に、物語の設定に無理のある部分も多いことは承知の上で、私がもっとも心を打たれた場面を紹介したい。東大生トウマの祖父で腕のいい庭師ヒサオ・ミシマは皇居の庭園の手入れを任されている。物語の最後、その庭園で仕事をしているヒサオに天皇が話しかける。もうすぐ引退する天皇（つまり現在の上皇だ）と年老いた庭師は何十年来の友情で結ばれており、親し気に言葉を交わす。そしてここでもやはり雨が降り、ヒサオは孫が家に忘れていったビニール傘を天皇に渡すのだった。

傘は天皇を経由してまた別の人間の手に渡るのだが、はたして日本文学において、こんな場面がいまだかつて描かれたことがあっただろうか。

天皇を主題にした日本の小説にはどのようなものがあっただろう。深沢七郎『風流夢譚』、大江健三郎『セヴンティーン』、または三島由紀夫『憂国』。もちろん、これらの作品の政治的性格をここで論じたいわけではない。私が強調したいのは、どの作品にも天皇をテーマにすることの一定の「重さ」を感じるということだ。日本人の作家が天皇について口にするには、覚悟めいた何かが必要なように思える。『天皇の傘』にはそれがないのだ。良い意味であっさりと、軽々しく庭師と天皇が会話する場面が描かれている。それはつまり、日本人には書けない領域の日本であり、外国人ならそれが書けるという可能性を表しているのではないだろうか。

ちなみに『天皇の傘』の最後には、次回作に続くと思われる場面も描かれている。あくまでジャンルはミステリーであり、世界を変える崇高な純文学といった類ではない。それでもトンマーゾ・スコッティのような在日外国人作家こそが新しい領域の日本を描いてしまうのではないかと、期待もしてしまう。

（翻訳家、元当館語学受講生）

～会館だより～

＜スペイン語　村上先生のラジオ番組＞

当館スペイン語講師　村上由利子先生のラジオ番組が 4 月からスタートします。

京都三条ラジオカフェ（FM 放送 79.7Mhz）

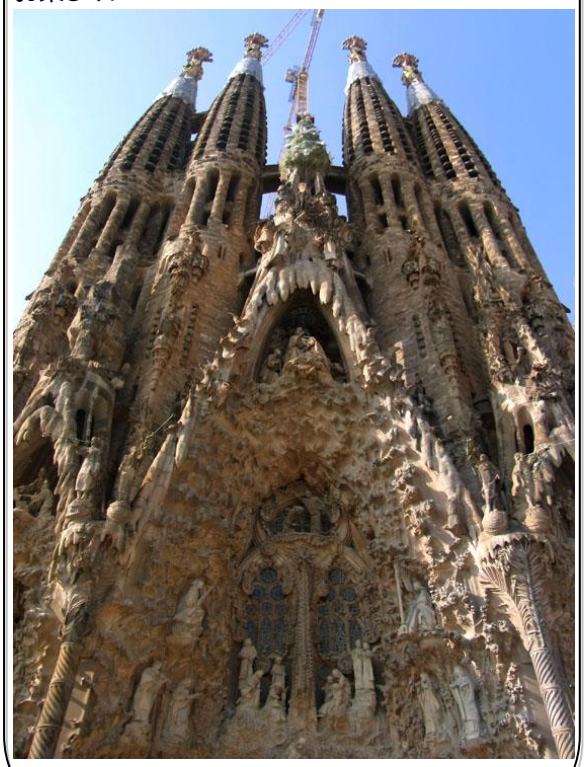
第 3 水曜日 20:00 より

「YULIA のスペイン　OLE！」

スペインの文化、歴史、世界遺産、祭り、あれやこれやを発信する番組です。

無料アプリ Listen radio をダウンロードして、京都三条ラジオカフェ 79.7Mhz からお聴きいただけます。

お楽しみに！



編集・発行 /（公財） 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL:(075)761-4356/FAX:(075)761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/